



My Honey



taichiumi

困った。またこの季節が来てしまった。

二月十四日、バレンタインデー。

この時期、一般女性ならどんなチョコレートを送ろうか夢中になっているだろう。そう、恋する女性のための日のはずだ。

私だって本来ならそうしたいけど、ままならぬこの現状。いやいや、私が悪いんじゃない。彼氏が悪いんだ。

恋人になってから四年。バレンタインの度に、彼は私に手作りチョコレートをくれる。

これが憎たらしいことこのうえない。趣味・特技共に、お菓子作り。プロを目指すつもりはないらしいけれど、その技術はすでに素人の域を超えている。

キッチンには、何年もかけて集めた調理器具がずらり。いざ作らせれば、フランスにでも行ってこいと言いたくなるほどに華麗なお菓子ができあがる。職場に持っていけばあまりにも評判で、取り合いの戦場になるらしい。

そんな人間に手作りチョコなんて渡せるか！

そういうわけで、私はいつも買ったチョコのプレゼント。何故か彼からは特製菓子。

しかも、ホワイトデーも素晴らしいお菓子が返ってくる。バレンタインでの交換じゃ飽き足らんのか、あの男は。

本当だったら、私だって一回くらい手作りチョコを渡したい。でも、それと同時に受け取るあの豪華絢爛なお菓子里、引け目を感じてしまう。

わかってほしい、このいたたまれなさを。

私のあげるチョコレートをいつも美味しそうに食べる彼は、あまりそんなことを気にしてないだろうけど。

「今年のチョコレートは何がいい？」

バレンタイン直前の休日、彼の部屋にて。もちろん、私が言ったのではない。

「何でもいいよ」

「だけどさ、特に何かない？ 今まで作ったやつでもいいから」

確か、三年前は生チョコ、一昨年はフォンダンショコラ、去年はザッハトルテだった。どれも、大変美味しゅうございました。

「去年よりもいいもの」

彼は早速、本棚にぎっしりつまったファイルから適当なレシピを探す。レシピは細かく項目別に分けてある。もう、研究者名乗れよ。

しばらくパラパラめくった後、彼はまじめな顔で頷いて分厚いファイルを閉じた。

「うん、一緒に作ろう」

「はあ？」

彼はいつの間に用意したのか、お揃いのエプロンを持ってきて私に渡す。至極嬉しそうに。

一応、黙っていれば「クールでいい男」に見えなくもないというのに、なぜそんなに楽しそうにキッチンに立つ。普段はむしろさっぱりとした性格なのに、なぜお菓子作りのことになると激甘になる。何年一緒にいてもわからんやつだ。

彼が満面の笑みで手招きをする。私はため息をつきながらエプロンを身につけた。

「でも、私あんまりお菓子作ったことないよ？ 自慢じゃないけど」

「じゃあ、普通にチョコレート溶かして固めようか」

そう言ってたくさんの型の中から特大ハート型を持ってくる。こんなの持ってんなよ。

そして、業務用と思われる巨大冷蔵庫から何種類も板チョコを出す。いや、私、チョコレートの種類とかわからないから。

大きな調理台の上には、きちんと分量を量った材料が並んだ。料理番組がこれから始まりそうな雰囲気である。

「先生、今日のお料理は何ですか」

「初心者でも簡単に作れるチョコレート、です」

やっぱりやつもその気だ。彼は手馴れた手つきでチョコレートを半分だけ刻んでいく。残り半分は私が切れということだ。

複雑な心を抱えながら、私は使いこまれている包丁を手を取った。

ん、思いのほか難しい。たかだかチョコなのに。

彼はそれを見てニコニコしながら口を挟もうとしたけれども、私は意地で全部自力で切った。

「刻んだら、とりあえずこのボールに。さて、次にやることは何でしょう」

そんなこと言われたって、さあ。私は机を見渡す。ナッツなどはもう切っているタイプだ。フルーツ、砂糖、洋酒、ボール、鍋、泡だて器、クリーム……。

「クリームを……」

「クリームを？」

「チョコに入れる！」

私はカップに入れようとした。それを彼が、ちょっと待った、と止める。

「一応、温めてから」

生クリームの行き先変更。鍋に注ぎ込み、レンジの火を点ける。

「沸騰させすぎないようにね」

彼の監修のもと、無事にクリームは温まった。それをボールに少しずつ注ぎ込み、混ぜる。

「何か、変な感じ。やけに分離してそうだよ」

「そこはね、こうやったほうが綺麗にできるかな」

私の背後に彼は回り、私の両手に自分の手を重ねて的確な指導をする。ちょっと、やめてくれ。いや本当に。

「うん、あとは型に流すだけだけど、ナッツとか入れる？ それかデコレーションとか」

「飴細工」

あえて用意してないもの尝试してみる。それでも、彼は当たり前のように砂糖を取り出して飴を作り始めた。

私はその間にチョコレートを型に入れ、荒熱を取った後に冷蔵庫へ入れた。

「どういふのがいい？」

「バラに満ち溢れた城」

わかったと頷く。なぜそんなにも簡単に返事が出るのか。不思議だ。

その前につっこんでくれ、私がそんなものを望むキャラではないことを。

ちょうどいい具合になってきた飴に適当な色をつけ、瞬く間にバラや城、何故かダンスをしている王子とシンデレラを彼は作ってしまった。

おい、著作権にうるさいあの会社から訴えられるぞ、と言いたいくらいの出来にめまいがする。

それを冷やしたチョコレートにトッピングする。特大の型なのでスペースはまだ余る。やつは私を見つめたが、何をしろっていうんだ。

「チョコペンでデコレーションしてみる？」

彼は、私にホワイトのチョコペンを渡してきた。混ぜる時と同様に彼の指導のもとで。少しだけ歪んだ線が、かなり浮いていた。でも、彼は満足そうだ。

それから数分後、私たちは出来上がったチョコを並んで食べた。

「二人で作って食べるのもいいね。いつもどっちか片方が作るだけだからさ」

「たいてい、あなたがね」

私が力をこめて言ったのをさらりとかわし、彼は美味しそうにチョコを食べる。確かに、美味しい。なんたって先生がこれだから。ついでに材料もあれだから。原価いくらなんだろう。産地はどこだったのかしら。

「って、何で食べてるの！」

そうだ。これはバレンタイン用のチョコじゃないか。カレンダーや時計を見る。明らかに、まだバレンタインではない。

「二人で作って、その場で二人で食べるのがいいんじゃないか」

彼は当然のように言った。いや、でもね。

「バレンタイン当日がいいなら、チョコレートフォンデュしようか。あれも楽しいから」

彼は、もう一片、チョコレートを口の中に入れて微笑んだ。

「ね、去年よりいいものだろう？」

それはあまりに、満開の花のような笑顔だから、私もついつられて笑ってしまった。

Honey Pie

バレンタインからもう一ヶ月か、早いなあ。

ホワイトデー。彼は今日もお菓子を作っている。

あれからというものの、私たちはよく二人でお菓子作りをしている。ていうか彼がしたがる。そのせいか、私の腕も大分上がってきているように思われる。

クッキー、マフィン、スポンジケーキ、タルト、パン。指折って数えてみると結構やってるな。

彼のレパートリーは、やはり半端なものではなかった。会社をやめても、店を出したら一生食べていけそうだ。

今日はおやつはなんだろうな。

「ねえ、何作ってるの？」

「パイ」

彼のことだから、冷凍パイシートなんて使わないで、一から手作りだ。

以前、パイ生地を作るのが楽しくて時間をかけてしまうから、パイの菓子を作る時は一日がかりになってしまうと言っていた。だから、直前のこんな休日に作っているのだろう。

彼が作っている間は私も暇だ。でも、最近はずっと彼の部屋でお菓子を作ってばかりいたので、どうも出かける気分にはならなかった。こうして窓辺で紅茶をすすっている。紅茶は彼がこだわりを持って淹れたものだし、スコーンやクッキーもやっぱりお手製。

贅沢かもしれないけど、どうしてもか悩ましくなる。何だ、この至り尽くせりは。姫気分になれているのだろうか。姫って歳でもないけど。

「何のパイ？」

「何がいい？」

決めてないんかい。私がキッチンまで赴くと、彼は丁寧に生地を纏めていた。

「今ねかせるから、その間に決めて」

冷蔵庫をあざると、フルーツがどっさり入っていた。想像以上に選択肢が豊富すぎて、私は言葉が出なかった。

いや、わかっているけれどもね。ていうか、一人暮らしでこんなに買ったなら腐らないのだろうか。

「何でもいいよ。イチゴ？ バナナ？ チョコでもいいし」

それと、と彼は、お馴染みの型置き場から色々取り出した。こっちの種類も相当なものである。

「こういうパイ皿で大きめに焼くほうが好き？ それとも、小さめのをいっぱい作る？」

「小さいほうがいいかな。明日のお昼に持って行きたいし」

彼はクッキー型と思われる、手の平サイズの型をいくつも取り出した。クッキーにしては少し大きめな程度だ。

「小さいのだったら、ジャムとか挟むだけでも美味しいんだよね」

ジャムももちろん、数をそろえている。高そうな小瓶がずらりと並ぶ。

「これとか封あけてないけど、いいの？」

「別に、食べたいならどうぞ」

何て贅沢な。とりあえず私は、開封済みのジャムや、買った時期の早いフルーツとリクエストした。うう、悲しきかな貧乏性。

「まさか、給料全部お菓子作りにつき込んでるんじゃないでしょうね？」

あまりの浪費振りに、疑いたくもなる。彼は笑った。

「まさか。むしろ、菓子作りの依頼受けたりして小遣い稼ぎはしています」

やっぱりしているのか。彼の言うところによると、色々材料を買っても、結局使い切ってしまうらしい。そんな施しをするくらいなら売って貯金の足しにしてよー。

「砂糖漬けめ」

彼はやはりにこにこ笑っていた。フルーツを調理すると、冷蔵庫でねかせていた生地を取り出した。

「これこれ、これが楽しんだよ」

生地を折りたたむ。絶対、私という時よりも小麦粉をいじっているほうが楽しいに違いない。だって、顔が輝いているもん。外で会うときは余裕な大人ぶってるのにさ。

「最近、二人で作るようになったら？ だから、ぜひこの楽しさを知ってほしかったんだ」

彼は麵棒をよこした。私は彼の言う手順で生地を畳んで、麵棒で伸ばす。だんだん整っていく生地の感触は、確かに良かった。

ああ、もう。この、菓子作りバカめ。

フルーツやジャムを乗せたり挟んだりして、未完成のパイたちはオープン皿に並べられた。

砂糖をまぶし、フルーツを乗せたものには蜂蜜を少しだけかける。一般家庭にはなさそうなオープンに入れ、スイッチを押す。

彼は、ふうと息を吐き、エプロンを脱ぎながらリビングに戻る。そして、私がさっきお茶を飲んでいたところに座る。

「お代わりはいる？」

頷くと、面倒そうな手順なのにてきぱきと淹れはじめる。

「これで、怒涛のスイーツ月間も終わりかな」

「なんで？」

「だって、バレンタインで始まってホワイトデーで終わる。キリがいいじゃない」

少しいじけた表情で、彼はじっと私を見つめる。そんな目で見つめられると、焦るじゃないか。

「……お菓子作りは嫌い？」

「ううん。別に」

体重が増えたとは言えない。きつこの人は、ダイエット菓子も一ヶ月毎日違うものを出し続けられるだろう。

しばらくの間、お互い黙り込んでいた。私は居心地悪く、ちらちらと彼に視線を送る。観察してみると、彼は紅茶に砂糖を入れない。コーヒーもだ。砂糖ジャンキーのくせに。「そういえばさ、紅茶にもコーヒーにも砂糖入れないよね」
「うん、全てに砂糖が入っていればいいってもんじゃないよ。甘くてもそうでなくても、好きなものは好き」

そう言って、私の目を見て微笑む。私は顔が熱くなって、目をそらした。

彼がテーブルに手をついて立ち上がる。

「さてと」

椅子を几帳面に元に戻し、彼は私の手を引いた。

「今頃、いい具合に焼けてるんじゃないかな」

向かう先はキッチン。オーブンを覗いて、彼は子供のようにはしゃぐ。

「ほら、ほら。層が綺麗に膨らんでるだろ？ これこそパイ作りの醍醐味なんだよ！」

あんたのせいで雰囲気ぶち壊しじゃ、ボケ。

焼きあがったパイを取り出して冷ます。これ、ラッピングして売ったらいくらになるかな。

ほどよい温度になった、ほくほくのパイの一つを割って、彼は私の口に放り込んだ。

ああ、美味しい。でも、バターも砂糖もたっぷりだなあ。今日の夕食は少し軽めにしよう。

もう片方は彼の口の中。もらった方よりも作った方がより嬉しそうに食べるっていうのもどうなんだろう。

飲み込むと、微かに蜂蜜の風味が残った。意外にもさっぱりしている。

「後味がいいでしょ？ これ、一番のオススメ」

彼は、蜂蜜の瓶を取り出した。ラベルに日本語は見当たらない。彼は、この蜂蜜の良さについて熱心に語る。

きっと、この人の脳髄は蜂蜜なんだろうな。

私はもう一つ摘んで、彼と同じように分けてそれぞれ食べた。こっちはまた別の味で美味しい。

この材料についてもやはり語りだす彼を見つめて思った。来年も、同じようなことが行われるのだろう。

別に嫌じゃないけれどね。

私は、彼の話にぼんやりと相槌を打った。

もう十月も終わりか。は一、さすがに寒くなってきたな一。仕事帰りの夜風は身に沁みる。体が温まるものでも飲もうかな。もちろん、彼の家とちがって我が家にはそんな大したものはないけど。

あ、そうだ、牛乳がまだ残ってたはず。温めてココアをほんの少したらすだけでも美味しいんだよな一。

彼ほどじゃないけど、実は私もキッチンに立つのは好き。ただし、彼がいないときに。だって、劣等感とかいろいろありますから。

お鍋にミルクをそそいでコンロにかける。早く飲みたいから強火にしちゃおう。

ことこと。

こうして湯気が立つまでを見守っていると、なんだかやさしい気持ちになる。なごむなあ。口の悪さも治ってしまいそう。うんうん。

そのときだった。

ピンポン。

なんか嫌な音がした。幸せなひと時が崩れ落ちた。

言っておくけれども、現在は夜。訪問にはちょっと適していない時間だ。

無視すると、もう一回ピンポンと鳴らす。ピンポン、ピンポン、ピンポンーうるせえー。

残念ながら、私を訪ねてくるやつでこんな常識を外れた神経の持ち主は、一人しか知らない。

トントントン。

リズムカルなノックが気に障る。遠慮のいる仲じゃないんだから、さっさと開けてこいや。

トントントントントントントントン。うぜえ。

「もう！ さっさと入ってきなよ！」

私は怒りながらドアを開ける。

「Trick or treat！」

目の前に、オレンジが広がった。ゆっくりと遠ざかる。これって……。

「ジャック・オー・ランタンです」

やつがニヤッと笑った。いや、傍から見ると無邪気なんだろうけど。

「……何やってるの」

「お菓子もらいにきました」

彼は両腕を広げて、おどけてみた。

こんなでかい子供がいたらびっくりだよ。

ていうか、彼は全身真っ黒。コートも黒。いや、確かに寒いけどさ、まだそんな大げさなの着るほどじゃないでしょ。

「その格好は？」

「仮装。ほら、ハロウィーンだし」

何に化けたというんだろう。吸血鬼か？ フランケンか？ どちらにしても、いい年して恥ずかしい人間だということに変わりはない。

「まあ、とりあえず、入れてよ」

「だが断る」

「だがそれを断る」

遠慮なくずかずか入るんなら、最初から家に入れ！

彼が我が家に来て真っ先に向かうのは、もちろんというか何というか、とにかくキッチンだ。

あ、そういえば！

私は彼を追い抜く勢いで室内に駆けこんだ。

「ああ、ミルクが！ ミルクがあ！」

アホの相手しているうちに、煮詰まってしまった。これじゃ飲めないじゃないかよ！

「大丈夫、大丈夫。心配しなくてもいいよ」

彼は特に感情に変化も見受けられず、なだめるようにポンポンと頭を撫でてくる。そうだ、こういうやつだ。

「これで何か作ろう！」

そういう発想がすばらしい。すばらしいが。

「残念でした。うちにめぼしい材料はないよ？」

そうだ、ここは私の家。

給料日前だから現在節約中。余分な食材など一つもない。近所のお店ももう閉まる頃合いだから、買い出しにも行けないはず。

しかし、私は気づいてしまった。彼の右手にはあのカボチャ、その腕にはスーパーの袋。

「ちゃんと買って来ておいたよ」

つまり、君にとっては最初から全てが予定通りなのだね。

渡された袋の中身を確認する。

「カボチャ、クッキー、バター……」

「本日のメニューは、超簡単パンプキントルトです」

またそんなカロリーの高そうなメニューを。時間と私の体重を考えてほしい。というか、今から作るのかいな。

デレデレした顔でウキウキとエプロンを用意している姿を、こいつの同僚に見せてやりたいわ。絶対唾然として、言葉も出ないだろうな。

これが、外だと気取っているんだからタチが悪い。菓子作りで有名なくせにさ。

かくいう私も、最初は、最初は騙された。そうだよ、詐欺だ、訴えてやりたい。

「で、このミルクどうするの？」

「まずはクッキーを砕いて、溶かしバターを混ぜて」

彼の授業は、生徒の都合とは関係なく進む。また、高そうな型を買ったな。

貯金はあるのだろうか、この人。気がついたら材料費や道具代に消えているような気がするけ

れども。

あと、食べ歩きも結構している。なのに、太らないんだよな。うううー、妬ましいっ。あんたなんか乙女の敵だ！

「型に詰めた？ それじゃ、冷蔵庫に入れて冷やして」

そこで取り出したるは、さっきのミルク。でも、すぐに置く。

「カボチャを切って、電子レンジで加熱しよう。切れる？」

なんだ、その言いかたは。まるで私になにもできない子どもみたいじゃないか。

女をなめるな！ これくらい簡単に切れるわ！

私は包丁に力を入れるが切れない。それをみて、苦笑するのが癪にさわるのだ。

「ああ、駄目だよ。そんなに力を入れちゃ危ないって」

例によって、彼は私の後ろに回り、私の手に自分の手を乗せる。

だからね、それやめてほしいの。包丁持ってるの、危ないの。

私の心など全然気にも留めないで、彼は少し手に力を入れる。ぶれそうになるのを、必死で抑える。

「ほら、ちゃんとカボチャを見て。ちゃんと切れ目を入れる場所があるんだから」

確かに、彼が動かした先では綺麗に切れた。昔からやってるから、ちゃんとわかっているんだろうな。

どうせ私はそんなに得意じゃありませんよっと。

「で、ラップで包んでチン。そんなにやりすぎないで」

ほかほかのカボチャはいい匂い。それを持参の裏ごし器で丁寧に漉す。そして、煮詰められたミルクのなかに入れられた。

「ちょっと煮詰めたほうが混ぜやすいんだ。あとは味を調節して」

うん、その理屈はよくわからない。けれども従うしかない。

カボチャペーストは、さっき用意した型の中へ。上を、よくわからないが何かすごそうなもので綺麗に飾りつけ。

「あとは焼くだけだね。休憩しますか」

時計を見ると、すごい時間になっている。うん、あれは明日の朝に食べよう。こんな時刻に口に入れちゃいけない。

「まったく、来るなら早くから言ってよね。こっちだって色々準備とかあるんだから」

「準備って、もしかしてお菓子？」

からかうような目でこちらを覗いてくる。だから、そういう仕草をやめてほしいんだってば。

「別にそういうんじゃないくて」

「Trick or treat」

「え？」

「お菓子をくれないと、いたずらするぞ」

そのいたずらのために来たくせに。私は笑って、思い切り小突いてやった。

「何するんだよ」

「いたずら返し」

「こっちはちゃんとお菓子用意したのに」

いい年して頬を膨らませる。とりあえず、お菓子に関してはお子様だ。

「私だって、ミルク用意したよ」

彼は一瞬止まって、笑い出した。私もおかしくて笑った。

いつの間にか寒さを忘れていた、十月のある日のこと。

Honey Christmas

ショッピング。それは、女の楽しみーではなかった。

さまざまなクリスマスソングが街中を飛び回る季節。あざやかなイルミネーションが綺麗に点灯して、夜景に花を添える。

ちょっと歩き回るだけで心がうきうきする季節に、私たちはいったい何をしているのだろう。

「ねえ、どっちがいい？」

それは私の台詞ではない。そして、迷っているのは服でも宝石でもない。ぶっちゃけ、男が製菓用品で真剣に悩む姿ってどうなんだろう。

今日は、年末前の忙しい時期にも関わらず、珍しく二人の休みが重なった。クリスマスもあと少しということで、買い物にでかけた。

さすがクリスマス効果というのだろうか、なかなかいい雰囲気になることもある。このままプレゼントをおねだり出来たらいいな、とちょっと期待していた私がバカだった。

彼が真っ先に向かったのは、製菓用品が一番揃っている店だ。

「今年はどの型にする？」

ネクタイよりもケーキ型の所有数の方がよっぽど多いと評判の彼は、もう棚の容量が限界にもかかわらず、さらにコレクションを増やしたいらしい。まだ丸いだけの型だけならいいけれど、やけにぼこぼこした形のやら図体のでかいのやらが場所をとる。

「いや、いまあるので十分です。あなた、毎年増やす理由があるの？」

「だって、マンネリじゃない？」

いや、年に数回しかないイベントケーキの形にマンネリも何もない。

私の知らぬ間にどれくらい作っているのか気になる。ていうか、ケーキ型よりも私たちの間柄のマンネリを気にするべきではないか。

「そりゃ、変わった形のケーキならすぐ飽きるねえ。普通に、丸いやつなら飽きないよ」

スタンダードが一番。そういう私を、彼はぼけっとした顔で私をみた。

わかっているのだろうか、やっぱりシンプルがいいんだって。お米は毎日食べても美味しいわけだし。

「で、味のほうは……たまにはこういうのも作ろうよ」

そう言いながら、私は簡単ケーキ作りキットの箱を持ち上げた。目の前の男はきょとんと首を傾げた。どうやら彼にはこういうものの存在が理解できないらしい。初心者のところから、インスタントに頼らないポリシーを貫いているそうだ。

でも、いまは色々売っているから、見てると楽しくなってきちゃう。全国の恋する乙女を応援したくなる。人の心配している場合じゃないけど。

「今年はシンプルにするよ。でも、ちゃんと作るから」

年甲斐もなく、見かけにも似合わず彼はふくれた。これが大の男でなければとてもかわいいだ

ろう。ひどく残念なことに気味が悪いのだ。それでも、最終的にはそんなやつに惚れた私の負けなのだろう。

買い物に夢中な彼氏とうんざりしている彼女。そんな奇妙な構図も、家に入ってしまったえば関係ない。

彼はすぐに手を洗い、台所に向かった。そうそう、この家で手を洗うときは業務用の消毒液まで使って洗うんだよ。面倒だけど、どうせあれにつき合わせられるのだから、私も丁寧にやっておく。

「はい、先生。今日のメニューは」

「誰でも作れるケーキです」

ちくしょう、それは私への嫌味かこのやろう。

私よりも数分ほど早く台所へ向かった彼のおかげで、材料も道具も全部そろっていた。もう今さらツッコミは必要ないだろう。有無を言わずに、今日もケーキ作りが始まった。

卵を片手割りする彼に適うわけもなく、私は用意されたものを根性で混ぜるに徹した。ぶっちゃけ力仕事は私の方が向いているのではなからうか。

泡立てが肝心なのだから、体力勝負だ。筋力には自信がある。これだけは、最初から彼にほめられるんだよな……いかんいかん、煩惱よ去れ。

ケーキなんて作ってみると思ったよりも簡単なものだ。手順どおりに材料を混ぜ、型に入れてオーブンで焼けばいい。それでおしまい。

それなのに、どうしてこの男は寄り道というか、ややこしいことにしたがるんだ。むしろ、簡単だからこそ、なの？

「ちょ、それ何？」

さっき見ていた型と同じようなツリーの形をした型。私の両手よりもさらに大きい。

「型。かわいいでしょ？」

「かわいい、かわいい。でも、さっきも同じようなの見てたじゃん。家にあるのになんでまた買おうとするのよ」

「よく見てよ。こっちはクッキー型だって。さっきのはケーキ」

ああ、そうですか。すみませんねえ、クッキー型とケーキ型の区別もできないオンナで。

私がケーキ作りをしている間に、彼はクッキーへと移行していた。

ああ、やっぱり普通のケーキじゃ終わらないのね。

そういえば、こいつの弟がケーキ作ったときは青かったらしい。まったく気持ち悪い兄弟だ。

まあでも、彼に仕込まれたおかげで、私もすっかり上達してしまった。ケーキ作りももう一人前？ これでいつでもこいつから独立できるに違いない。

私はさっさとケーキ生地を作り、予熱ばっちりのオーブンに突っ込んだ。そして、彼もさっさと作ってしまったクッキー生地を型で抜いて、別のオーブンにイン。

そう、この家には二つもオーブンがあるのだ。不経済極まりないよねー。今日に限らずいつも稼働させてるし、月々の電気代いくらなんだろう。

「本当は三つくらい欲しいんだけどね。やっぱ狭いじゃない」

うちよりも倍以上広いキッチンを持ちながら何をいうんだ、殴るぞ。

こいつと一軒屋持つことになったら、キッチンが優先されるのかなあ。私だって家に夢持っているんだけどなあ。

焼けるのは、クッキーのほうが早かった。クッキーだって三十分くらい寝かせていたはずなのに、どうしてこんなに早くできあがるのか。先に作っていたケーキはまだまだ時間がかかりそうだ。

「ケーキのコツは、慌てず騒がず。おとなしく待っていればいいんだよ」

のんびりしてるな、こいつは。そう思いながら振り向いて、私は度肝を抜かれた。なんか、ツリーがある。いや、さっきのクッキーである。しかし、もうすでにクッキーの面影はどこにもない。

リアルな緑色に塗られている。ああ、抹茶ですか、苦そうですね。あなたは本物を追及しすぎではないだろうか。呆れてものも言えない。

「ほら、せっかくクリスマスだし、職人魂に火がついてさ」

やれやれ、と可愛らしく言っても、もとは大の男。気色悪いのに、こんなに無邪気に言われてしまうとどうしようもない。私は苦笑した。

「私にできることは？」

渡されたアイシングという白いものを、緑の上に搾り出す。うん、なんか雪っぽい。

ツリー型のクッキーに気を取られていて、彼が他にも型抜きクッキーを焼いていた事実をここで初めて知った。かわいい形でうっとりするけど、目の前にいる男の持ち物だと思うとすこし切ない。

クッキーやドレンチェリー、チョコレートなどを飾りを用意しているうちに、もうひとつのオーブンが仕事を終えた。

開けてみると、ふわふわのスポンジが湯気をたてていた。甘いにおいに浮かれながら取り出すと、私にしては上出来な作品となっていた。

なんか、上手くいくとうれしいな。自分の子どもみたいなんだもんね。愛おしいっていうかさ。

うっとりしていると、背後に彼が迫っていた。

「君もだいぶ目覚めたね。洗脳した甲斐があった」

はい、台無し。洗脳ではない、けして洗脳ではない！

そう言い返すと、穏やかな笑みを浮かべてくる。これが、会社でどんな姿をしているのか考えると寒気がする。

付き合ってからはずっとこんな感じだから気づかなかったけど、俗にいうツンデレというやつだったのだろうか、この人は。

ケーキを冷ます間にクッキーの残りを仕上げた。そして、生クリームを混ぜていると完成への実感がわいてきた。

冷ましたスポンジをカットし、中にフルーツとともに挟む。そして、厚さを増したスポンジのうえから雪のように真っ白なクリームを全体にぬりつける。

うーん、これって、綺麗にできないんだよな。

「あ、いつもの通りにでこぼこでいいよ。いまはそういうの流行ってるから」

なんか、いま私のプライドが少し傷ついた。しかし、へこたれている暇はない。彼が用意したレンガっぽいチョコレートを側面に貼りつけるのだ。そこまでくると、もう完全に彼の思惑が見えていた。

「はい、クッキーを乗せて、ツリーケーキの出来上がり」

結局、彼に寄せられてしまった。また今年も、アブノーマルなケーキができてしまった。

「あれ、気に入らない？」

にやにやししながら覗き込んでくるところがいやらしい男だ。そんなわけないに決まっている。

「メリークリスマス」

「まだちょっと早いよ」

窓の外からは、街のイルミネーションが見えた。

Honey Wedding

「とうとう明日かー。早いねえ」

左手の薬指に光る指輪を見ながら、私はうっとり感嘆の息をもらす。たまにはこうして乙女っぽいことしてもいいよね。

「ああ、とうとう明日だよ。こんなことならあと一ヶ月くらい先にすればよかった」

ちょっと待ったああ！ それはどういうことだっ！

私たちは明日結婚式を挙げる。ここまで長かったような短かったような。

すでに入籍して一緒に住んでいるとはいえ、やっぱり私だって女だし、感慨にふけったりもしたくなる。

それなのに、ヤツときたら。花嫁よりもウェディングケーキに夢中だ。

「デザイン決め、マジパン作り、飴細工作り、シュガークラフト……。この俺がまさかここまで時間かかってしまうとは。一生の不覚だ」

「あのさ、一生の不覚って、結婚式前日に言わないでくれない？」

どうしてそんなに気合い入っちゃってるんだらう。こういうのって普通花嫁がハイになるものだよね？ 逆に冷静になるわ。

周囲の期待どおり、ウェディングケーキは彼自ら作ったものを披露する。引き菓子だって、もちろん彼の手作りだ。

どういうわけかはわかるけれども、招待客全員から期待されているようだ。

ケーキも引き菓子も、事前に会場となるホテルのキッチンを借りて作り終えている。それなのに、まだ何を作るというのだ。

「やっぱり飾り増やしたい」

「もうこれ以上はやめときなよ。崩れるよ」

「俺のケーキにかぎってそれはありえないから安心していいよ」

どっかのスイーツ女子よりもタチ悪いわ、こりゃ。

スケッチブックに描かれた、超絶豪華なケーキデザインは感動ものだ。ホテルのパティシエさんも「素人でいるのはもったいない」と褒めてくれたくらいなもの。

でも、もうそろそろいいだらう。ここからさらに手を加えたいとか言ったら、さすがにホテルの人も苦笑いだ。

「どうせみんなにあげるときは全部飾り取るんだからさ、もうよくない？ 披露宴はたった一日なんだし」

どうして、女側からこんな台詞を言わなくちゃいけないんだろ。

私だって「ああーん、やっぱりドレスあっちのほうがよかったー」とかワガママ言えばいいのかっていう。

「たった一日、されど一日。結婚式は一生に一度、ウェディングケーキ作れるのだから一生に一度しかないんだよ？」

だーかーらー。もう、手遅れだわこれは。

「だったらコンクールに出せばいいんじゃない？ そうすればたくさん作れるよ」

別の人と結婚式挙げればいい、なんてさすがに冗談でも言えない。

「……そうじゃないって」

急にしゅんとした声になる。

「君のためのウェディングケーキは一回だけだろ？ だから、俺の一生に一度の晴れ舞台ってわけ」

「え？」

「コンクールなんてそういうのはいいの。明日の君が美味しいって言ってくれればそれでいいの」

どうしてそういうことを、まっすぐ私の目を見ながら言うのかなあ。

思わず赤面するのを手で隠す。彼はその手をやさしくどけた。恥ずかしい、今、すごく恥ずかしい。

「だからさ、ウェディングドレス着た君が最高に喜んでくれるケーキを作りたいんだ。心の底から幸せになるくらい美味しいやつ」

……じゃあ、素直に美味しいって言いたくなるような環境も用意してよお。いつもなんか違うんだって。

「ファーストバイトってさ、花婿は一生食べるものに困らせないことを、花嫁は一生美味しいものを作ってあげることを、それぞれ相手に約束するんだろ」

「うん」

「俺、両方約束するからね」

ああ、実に彼らしい言葉だ。

「私は……料理はあなたに任せるから、食べるものに困らせないことだけ約束させていただきます」

「なんだよそれ！」

あー、おかしい。本当に、こんな馬鹿らしいことで笑えちゃうんだから、私って幸せなんだろうな。たぶん、彼といるかぎりずっと。

とりあえず、美味しいお菓子には一生困らないことは確実だ。

翌日。ウェディングケーキはとてもすばらしい出来になった。評判は言わずもがな。

写真映えも見事なもので、ケーキとのスリーショット写真をフォトフレームに入れて自宅に飾ったところ、お客さんみんながまっさきに注目して褒めてくれる。

……その横に、カメラマンさんが撮ってくれた、スタンダードな夫婦のツーショット写真もあるんだけどなあ。こっちのほうの私、とても綺麗に映ってるんだけどなあ。

それはともかく。私は今日も、旦那さまお手製のお菓子で幸せなティータイムを過ごしている

。

あの約束は、おそらくこれからもずっと守られることだろう。

絶品のタルトを口に入れながら、私は心の底から「美味しい」と告げる。それだけで彼はとても嬉しそうに笑う。そんな毎日が愛しいのだ。

どうする、俺？ 何でババ抜きみたいなことをさせられているんだ？

とある夕暮れ、付き合い始めてもうじき二年になる彼女はにこにこしながら三枚のカードを俺に差し出してきた。これはどこかのCMだろうか。いや、まったく選択肢が見えない分、こちらのほうが更に性質が悪い。

「引いて引いて！」

少々バカなところが自他認める彼女の売りだけど、このカードに何を書いたのか想像するだけで恐ろしいものだ。単に突拍子もないことなら、可愛いという一言で済まされるのだが、こいつの場合はそうもいかない。

「お願い」

結局は言うことをきいてしまうのだから、俺も甘いものだ。それも、自他認める俺の売り。口悪くても愛情はあるんだ。

思い切って引いてみた。心臓の高鳴りとともにひっくり返してみる。

「ケーキ作り……」

その五文字が綺麗な字でど真ん中に書かれていた。どういうことだ。

「あ、ケーキだあ！ わーい！ じゃあ、来週お願いね。他はこんなのだったんだよう」

残り二枚には、某ブランド品のバッグ、某高級レストランフルコース。どうやら一番安いものが当たったらしく、ほっとする。あつぶねー。しかし、これはいったい何だ？

「来週？」

「あたしの誕生日！」

悪い、忘れていた。そういえば、もうそんな時期か。

去年は一緒に食べたクッキーの中に紙があって、そこに『ドライブで温泉』と書いてあった。まだ免許取ったばかりなのに何時間も運転して、はるか遠い温泉の名所まで行かねばならぬ悪夢だった。

「もう、忘れてたんでしょ？」

「悪い悪い、最高のケーキ作ってやるから、機嫌直せよ、な？ どんなのが食べたい？」

彼女は思い切り悩んだ。そして、とびっきりの笑顔で窓を指して高らかに言った。

「空色のケーキ」

空色？ なんだそりゃ。

「……空ってあの空？」

「うん、二人の思い出の空！」

思い出？ そういや、俺たちが付き合うきっかけになったのが空だった。

こいつが土手に寝っ転んでいて、空を見上げていた。前々から変なやつだと思いつつ気になっていた俺も、可愛く促されていて一緒に眺めることとなった。

真っ青な画用紙の空にクレヨンのような筆跡の飛行機雲がやけに綺麗で、飽きもせず見つめていたんだ。

「あたし、飛行機雲大好き！」

彼女がそう言うから、俺も、と続けかけた。そしてつい、俺はお前が好きなんて言っちゃったんだよな。

うわ、恥ずかし！ 俺、めっちゃ恥ずかしい人間じゃん！ それがどう取られたかは知らんが、彼女と俺は付き合うようになった。

そう考えてみると、こいつの発想は大変愛らしい。よしよし、作ってやろう。

ん、そういえば空色ってことは青だよな？ 青い食品なんてあったか？ 野菜は緑だ。ブルーベリー……俺にとっては赤紫だ。ブルーハワイじゃ微妙か？

「楽しみにしてるね！」

そういう彼女の姿を見ると、うんとしか言えないヘタレな俺。

「というわけで、助けてくれ」

彼女の誕生日の朝、ここは都内のマンション。目の前には、目元が俺に微妙に似ている男。そいつはとてもいやらしい笑顔で俺を見た。気持ち悪い。

「このお兄様を頼ってくるとは、愛いやつめ」

頼りたくねー、ぜってえ頼りたくねー。でも、彼女のことを考えれば俺の嫌な気持ちなんて、なあ俺？ がんばれ俺、負けるな俺、取って食われるな俺。

この九歳違いの兄は昔から苦手だった。出来がすこぶる良くて見かけもそこそこだから、いつも比較されてきた俺は大変惨めだった。むしろ、俺は嫌いな部類に入る。

しかし、やつにも良いところはある。それは菓子作りだ。どういうわけか、やつは菓子作りが気持ち悪いほどうまい。そのときの言動も気持ち悪い。

普段クールなのにお菓子作りになると性格が変わるなんてそれも素敵！ 単純な女子どもは口をそろえるが、厳密に言うとそれは少し違う。単に自分の好きなこと以外は興味がまるでないのだ。だから普段は黙ってそっぽ向いて、ひたすら菓子作りについて考えているだけである。決してだまされるな。

ま、こういうときには使えるやつだから使っておこうではないか。

「いいね、いいね。彼女のために菓子なんてまさに愛だ！ まるで俺みたいじゃないか。やっぱり兄弟って似るんだな」

似たくねえ。ていうか、こいつのねばっこい愛と俺の純粋な愛を一緒にされたくねえ。

「言っちゃなんだが、お前の愛は若干気持ち悪いよ」

「そんなことないぞ。ちゃんと彼女は受け止めてくれるよ」

あの女はむしろ諦めて受け流しているだけだと思うぞ。この色ボケに言っても無意味か。むしろ、頭まで砂糖漬けされているのだろうか。

「この間だってさあ」

「んな話はいいから、さっさと教えろよ」

棚から取り出したおそろいのエプロンを身につけさせられる。でも、兄貴のエプロンはパステルカラーで俺のは黒い。

こいつ、ピンクが恐ろしく似合わない。腹の底まで意地汚い色をしているからに違いない。

「これは彼女の。お前なんかに着させないよ」

爽やかな笑顔でそう言われたら、傷つくのも面倒になってきた。さっさと菓子専用の棚を開ける。

ずらりと並んでいるのは、どれも菓子の型だ。聞くところによると、スポンジケーキの方だけでも二十種類以上はあるという。それにクッキーやらマドレーヌやら合わせたらとんでもない数になる。

そういえば、こいつが一人暮らし始めるつつったときは母さんが喜んでたな。キッチンが広くなるって。

このマンションを選ぶのにあたって一番重視したのもキッチンやダイニングの広さらしい。そのせいで部屋数も独り身にふさわしくないというのに、よく家賃が払えるものだ。そんなに儲かる職業か？

駄目だ、駄目だ！ どうも嫉妬してしまう。いや、彼女では俺のほうが上だね。若いし可愛いし、天然だし。おし、ファイト俺。

「で、空色のケーキなんだけどさ」

「着色料使えばいいじゃん」

至極まともってというか、少し冷たくありませんかお兄様？ 体に悪そうなものは嫌いなはずなのに、着色料は持っている。

「いや、さすがに自然で青いのは難しいから。マジパン細工するときはやっぱり食紅とかだね」

そう言いながら青い着色料を取り出す。ついでに、青いゼリーとか某ポーションとか持ってきた。

「これさ、アメリカから輸入したけど体悪そうな色だよ。こっちはとりあえず何か染めるときに使えるかなって。飲む？」

某ポーションは飲んだことはないが、悪い噂しか聞かない。体力回復どころか、HPが1になるってダチが言った。こんなもの愛する彼女に捧げるケーキに入れろって言うのか？

「飲まない！」

「そう言わずに」

げえ、こいつ無理やり突っ込んできた。うえ、うええええ。なんか身に覚えはあるけど、感慨にふけるような味じゃないぞ。

兄貴はのた打ち回る俺を見ながら、とても真面目そうに顎に手を添えた。

「やっぱり駄目か。捨てよう」

最悪だ、いっぺん地獄に落ちてしまえ。

結局、素直にまだ安全そうな青の着色料を使うことにした。

「でも、青いケーキが欲しいなんて変わった彼女だねえ。青って食欲減退させる色なんだよ」

「え、そうなの？」

「うん、だからあんまり食べたくなくなるようになってダイエット用に青いふりかけって売っているし」

知らなかった……。でも、俺たちの思い出は青い空なんだ。こんな悪魔のささやきには負けない！俺は絶対に勝つ！

「愛は食欲に勝るんだ！」

「へえ、そう。じゃあ、生クリームに青入れるとして、生地はどうするよ？ そのままだと黄色だよ？」

生地までは考えてなかった。土手といえば、芝生……だよな。でも、緑色に青いクリームってどうだ？ いやいや、普通にしよう。

「黄色……でいい」

兄貴はにやりと笑った。

「でいい？ 愛する彼女に贈るケーキに、『黄色でもいい』？ 妥協するの？」

う、こいつは痛いところを突いてくる。そういうのが上手い男なんだ。ちくしょう。

「訂正します、黄色がいいです！」

「はいはい。では、さっそく始めましょう」

ちょっと待て、まだ材料は何も用意してないぞ。そう言おうとした俺の手をすり抜けて、この部屋と同じくらい独身に似合わない大きさの冷蔵庫を開ける。

「ん、何？ あ、これがスポンジケーキの四号用の粉ね。二人だったらこんなものでしょ。それとも、もっと食べる？」

「あの、どうして粉の入った袋がそんなに並んでいるのでしょうか？」

「ああ、頻繁に作るからね。暇なときに粉をふるって量ってサイズごとに分けておくんだ」

ちなみに俺は今日、一言も兄貴んちに行くなんて連絡しなかった。まったくの突撃だった。

それなのに、なんで、こんなに品揃えが良いんだ？ 普通、生クリームとかフルーツとか、一人暮らしの男の冷蔵庫に常備してあるわけないだろ？ あ、こいつは普通ではなかった。

本当に一人暮らしになって生き生きしているな。我が家にいたときはさぞかし手狭だったろう。

「卵は一個かな。あと、バターと牛乳とバニラエッセンスと砂糖だろ、はい」

食べ物って開封すると傷むの早いんじゃないかな？ どれもこれも小分けだ、どうせ全部傷む前に使い切るんだろう。砂糖なんて十グラム単位で仕分けされているぞ。

あっというまに材料は正しい分量で揃ってしまった。所要時間、約三分。確か、俺の彼女が俺の誕生日にケーキ作ってくれたときは、ここまでに篩う作業もいれてで三十分かかっていた。あ、あいつが可哀想だから比較しないでおこう。

「スポンジケーキは基本だからね、アレンジは自由だし作り方だけ覚えておいても損はないよ」

というわけで、ドキ☆男だらけのケーキ作りは幕を上げた。それにしても、色気ねえなおい。

卵は黄身と白身に分けて、黄身は湯煎にかけて人肌に温めながら、白っぽくなるまで混ぜる。

そうしたら、砂糖を三回に分けて投入し、さらに混ぜる。

「あの、なんで自力で混ぜているんでしょう？」

「は？」

「ハンドミキサーは？」

「んなもん、必要ない。男なら手で混ぜろ！」

ちっ。心の中でだけ舌打ちをすると、またまた兄貴の目が光る。愛する彼女へ贈るケーキなのに、楽をする気か？ そんなオーラを感じる。まったく、こいつの愛だとかなんだとやってただの怨念じゃないか。

よくわからないけど、ちょうどいい固さになったらしい。そうしたら、今度は白身だ。こっちは黄身以上に力が入るけど、果てしない作業だ。兄貴は俺の手つきに何か言いたそうで、何度も手を上げかけては戻す。

「何だよ」

「メレンゲはさ、もっとボールに叩きつけるようにするんだ」

じゃあ、手本見せろと言ってみる。すると、俺の情けない音とは違って軽やかな音を立てながら、白身はどんどん濁って行って、きめ細かい泡へと変化していった。

同じようにやってみな、と兄貴に返されたので同じようにやってみると、瞬く間にメレンゲは出来上がってしまった。

で、よく混ぜた黄身と白身を混ぜ合わせる。このときに、溶かしたバター（兄貴が勝手にやってた）と牛乳とバニラエッセンス投下。

「こらこら、乱暴に混ぜるな。泡がつぶれたらふくらまない」

「わかってるよ！」

そうしたら、粉を篩いにかけて混ぜる。さっくりと、さっくりと、さっくりと、さっくりと……。

「あの、粉が混ざらないのですが」

「もう、しょうがないな」

そう言いながら、兄貴は俺からボールを奪い取る。そして、見事な腕であっという間にいい感じにしてしまう。やっぱ上手いんだな、こいつ。

型に移し、あらかじめ温めておいたオーブンに入れて時間をセットする。ブーン、と音を立ててオーブンの中が赤くなる。

「ほら、とりあえず使ったものは洗って仕舞う」

見とれてた俺に冷たい声。心配なんだから覗くくらいさせろっての。しかし、逆らえないので使ったボールや泡だて器などを洗い場に持っていく。

せっかく人が洗ってやってるのに、その道具は手入れがどうのこうのなんて言うからむかつく。そんなに大事なら自分でやれよ。

兄貴は新しいボールと砂糖、生クリームをこっちにちらつかせた。

「上、どうするの？ クリームだけじゃ味気ないだろ？」

そうか、まだデコレーションってやつが残っていたのか。うーん、どうしよう。思い出せ俺、

あの日のことを。

春で土手は綺麗な緑色で、どっからか野球の練習してる音が聞こえてた。風が気持ちよくて、雲が流れて……あ、そうだ。

「青いクリームに飛行機雲！」

「はあ？」

「俺たちを結びつけたのは飛行機雲なの！」

兄貴は怪訝そうな顔をしてメモ帳を取り出し、丸いケーキの形だけ書いてこっちへ乱暴に投げて寄越してきた。

つまり、自分でイメージ図を描けてることか。これでも俺は、こいつよりも絵心があるはずだ。こう描いて、こう描いて、よし。

「こういうの！」

自信満々に見せると、兄貴がぽかんと口を開けたあと失笑した。失礼なやつだ。

「つまりは、二色のクリームと、マジパンで人形作るんだな」

マジパンなんて普通の男は出せって言ってもすぐには出せない。それなのに冷蔵庫にはちゃんと入っているんだよな、これが。

「パンって作るの手間かかるんだろ？ いつ作るんだよ」

「パンはパンでも、これはアーモンドと砂糖を練って作ってるから、面倒じゃないんだよ」

あれ、知らないの？ 当たり前のようにそう訊いてくるから頭にくる。はいはい、どーせ俺はバカですよー。

マジパンは粘土みたいなものだ。爪楊枝っぽいやつを使いつつ、形作っていく。俺が彼女の人形を作って、兄貴は俺の人形と飛行機を作る。

「おい、あんまり俺を不細工に作るなよ」

「実物に忠実に作ってるだけですけど」

ほんと、むかつく。でも、やればやるほど俺の作る彼女はブスになっていく。兄貴のことを気にかける余裕もないくらいに。違う違う、あいつはもっと可愛いんだ！ 見てられないといったような表情で兄貴が手を出そうとするが、俺は譲らない。

「ほら、できた！」

並べてみると、兄貴の作った俺のほうがかっこいい。俺の作った彼女はもはや人間じゃない、悪い意味で。あー、落ち込む。あいつ、こんなの見たらがっかりするかな。

「貸せよ、ついでに彼女の写真、携帯とかにない？」

兄貴は俺の返事も俺の許可も聞かずに勝手に携帯を開けて、彼女の写真を見た。そして、爪楊枝をちょいちょいと動かし始めた。

「プライドも大事だけど、落ち込むくらいなら素直に寄越しなよ」

そう言った次の瞬間には、ちょうどよくデフォルメされた彼女がいた。すげー、マジで似てる。素直に感動してしまう。

「あ、あんがと」

「どういたしまして」

このときばかりは、兄貴の笑顔も爽やかに見えた。実際、こいつは腹黒いけど。

気がついたら部屋のなかにいい匂いが充満していた。はっきり言って、母さんが作るときよりもずっといい匂いだ。

オーブンを開けると、ものすごく膨れ上がったスポンジが存在していた。取り出して型から外して冷ます台みたいなところに置くと、ふわふわさが見てるだけで感じられた。

冷ましている間に、クリームを泡立てる。いつも思うんだけど、こんな牛乳が何でとろとろになって最終的にツノが立つんだろう。謎だ。長い時間かけて泡立てたら、ふたつに分けて、片方には青い着色料を入れる。

うわ、すっげ一色。でも、あのときの空みたいだ。

「何、にやけてるんだよ」

「べっつに。ほら、あとは？」

兄貴のほうがずっと気持ち悪い笑顔で、吐き気がする。

「スポンジは冷めた？ 冷めたら中切ってクリームとフルーツ挟むよ。あ、フルーツはどれにするんだっけ」

彩りとか考えて何個か選ぶ。むかつくから、高そうなものをちょこちょこ選んでやったけど、特に懐にダメージはないようだ。そして、兄貴は頷くとナイフ片手にすらっと切ってしまった。その時間、約十秒。

「え、え？」

昔流行ったっけ、フルーツの早切り選手権……って何でお前そんな技術持ってるんだよ。職業、普通の勤め人だろ？ それとも、陰で暗殺者でもやっているのか？

「好きこそ物の上手なれってね」

大の男がウインクするなよ、気持ち悪い。でも、ちょっとかっこいいと思ってしまう俺っていたい……。

冷ましたスポンジは、背を温めた包丁で等分する。そして、白いクリームとフルーツを挟む。そうすると、ますます縦のボリュームが出た。

なんか、売ってるケーキみたいだ。ひそかに感動してしまう。なんか、ちょっとだけ兄貴がケーキ作り好きなのわかる気がしてきた。

外は青いクリーム。満遍なく塗ったら、絞り袋で白クリームの雲を描く。絞り口のパターンもさすがに兄貴はたくさん持っていて、何をどうやったらいいのかも実演してくれた。そして、外用に取っておいたクリームとマジパンを乗っけて。

「完成！」

出来上がったケーキは、本当に売り物になりそうなくらい綺麗なケーキだ。デコレーションも兄貴が主体となってくれたし、マジパンは兄貴がほとんどやったし。すごい……。

「良かったな、これで彼女も喜ぶな。なんて言ったって、愛する彼氏が頑張って作ったケーキだし」

兄貴は俺の肩を、兄らしく叩く。そうだ、彼女のために頑張って作ったケーキ。そうだけど……でも……なんか、もやもやする。

「いや、これは違うよ」

兄貴が眉をひそめて俺を見た。俺も同じような顔をしているのだろう。だって、これは……これは……俺が頑張ったわけじゃない。

「俺が、兄貴に頼んで作ってもらったケーキだよ」

思い返せば、俺がやったことよりも兄貴がやったことのほうが多い。俺はダメダメで最終的に兄貴に頼ってた。

お前なんか、とか言ってたの誰だよ。結局は兄貴に任せてただけじゃん。しかも、それで兄貴に目を輝かせてすごいすごい言って、当初の目的を忘れてたじゃん。

目をやると、兄貴は気まずそうに目を泳がせていた。こめかみあたりを搔くのは、昔から困ったときのこいつの癖だ。しばらく沈黙して、兄貴は口を開いた。

「ごめん。お前がケーキ作りたいてって言ったの、すごい嬉しかったんだ。だから調子に乗っちゃってさ。すまん」

確かに、兄貴はいつになく嬉しそうだった。

そもそも、俺たちってこんなに会話したことあんまりない。歳がちょっと離れてて、あんまり兄弟らしいやり取りはなく、気がいたら兄貴は大人になって出て行っていた。

だから、兄貴がたまに帰ってきてても家族というよりも他人って感じがして、つついそっけなくしていた。

兄貴は力なく笑う。

「そだよな、ちょっと兄ちゃん手を出しすぎたな」

何だよ、そんなこと言われるとこっちの胸が痛くなるじゃん。

「別に、兄貴のせいじゃない」

ぴくりと兄貴が動いた。俺は、いまいち兄貴をまっすぐ見られなかった。

「俺が兄貴に頼ったんだし、本当に全部自分の力でやりたいならここに来なければ良かっただけだ」

兄貴は、ちょっとほっとした表情になった。それを見ると、俺もちょっと安心する。すると、兄貴はテーブル叩きながら立ち上がった。

「よし、最後の仕上げだ」

へ、これで完成じゃないの？ さっきまでのしんみりムードをきっぱりと断ち切って、兄貴は冷蔵庫をまた開けた。

「これを使いな」

兄貴が俺のところに持ってきたのは、でかいチョコレートのプレートだった。こんなものまでこいつは常備しているのか。ていうか、何だって言うんだ。

「彼女への思いのたけをぶつけるがいい」

チョコペンも差し出してきた。俺たちは、同時に笑った。

本当にケーキを完成させると、兄貴が車で彼女の家まで送ってくれた。礼を言いながら降りると呼び止められた。振り向いて兄貴を見たら、ガッツポーズされた。

「まあ、頑張れ」

俺も豪快に返事をして階段を駆け上がり、彼女の家のチャイムを鳴らす。彼女は、今日一日の疲れを追い出すような笑顔で迎えてくれた。

「わーい、ありがとう！」

「兄貴と一緒に作ったんだ」

言ってみると、なんか恥ずかしい言葉だ。

「お兄さんって、カッコよくてケーキ上手いんでしょ？ 嬉しい！」

俺の思いとは裏腹に、屈託なく言ってくれるもんだから涙が出る。彼女はわくわくしながら箱を開けて、悲鳴のような声をあげた。

「きゃあ、青！？ なんで青？」

ん？ だって……。

「俺たちの思い出の空。俺が告ったときの青空……」

「えー、違うよう。あたしが言ったのは、あたしが自分の思いに気づいたときの空！ 夕焼けのなか、よく一緒に帰ったじゃない！」

はあ？ 確かにそうだったような……って、マジで？ いまこの瞬間までまったく記憶になかった。

「んなもん、知るか！」

「ひっどーいっ」

人の心を完璧に読めるほど俺は大人じゃないんだよ！ 赤か……赤だったらもっと食べ物らしいケーキになっただろうか。そう思うと、少しこの青いケーキが切なくなる。

俺のそんな表情を見た彼女は、にっこりと言った。

「でも、これも思い出だね。食べよ食べよ」

ああ、何てやさしいやつだろう。俺、本当にこいつのこと好きだなあ。

彼女に切り分けてもらって一緒に食べたケーキは、めちゃくちゃ美味しかった。今までこんなにケーキを美味いと思ったことはなかったくらいに。

俺は今まで生きてきたなかで、今日ほど兄貴に感謝した日はない。

他の家とは違って、うちの兄貴なんて他人同然だと思っていたけど、今日はなんとなく家族って感じがした。あとでメールしよう。

俺が念をこめて『大好きだ！ ずっと一緒にいよう！』と書いたチョコプレート。彼女はそれを嬉しそうに食べる。窓の外には、少し日が傾きかけた青空が広がっていて、ほのかに蜂蜜色がかかった青色をしていた。